ラブライブ ～高坂穂乃果の裏の顔～

sunlight

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『人間は誰しも裏の顔を持っている』 その言葉は紛れもない事実だ。誰もが心の中で思っていることは言わず当たり障りのないことを言って笑っているだけ…

そんな本性を隠している少女がここにも1人いた。

明るい笑顔で仲間を引っ張り、無鉄砲でお調子者だが、いざという時は頼りになり、仲間のエンジンとも言える彼女。

しかし、それは本当の彼女ではない。

家族にもかけがえのない仲間にも本性を隠している彼女は果たして何を思うのだろうか？

そして、そんな彼女は救われるのだろうか？

これは、そんな少女の物語である。

出来はかなり悪いのであまり期待はしないでください。

感想やご要望があれば続きを書きます。

目　次

本当の自分 ―― 1
高坂穂乃果の日常 ―― 5
本性を知る者たち ―― 10
本性を隠している者たちの会話 ―― 15
本性を知ったもの ―― 19
高坂穂乃果の日常　希side ―― 24

本当の自分

皆さんこんにちは‼？
私の名前は高坂穂乃果です！
音ノ木坂学園の２年生でみんなを明るく引っ張る元気なリーダーです！
勉強は苦手だけど、運にはかなり自信があるよ！　希ちゃんには負けるけどね…
実家は和菓子屋で穂むらの看板娘です！
今は最高に楽しい！　８人もの大切な友達ができてラブライブといつ目標に向けてみんなで頑張っているからね！

「って設定を作っている高坂穂乃果です」
高坂穂乃果は自分のノートにさっきの事をわざとらしく大きな文字で書くとふっと軽く自嘲気味に笑った。
そして、本当の自分を頭の中で呟く。
（あれは、全部嘘なんだよね…　まあ、頑張っているのは本当だけど…
よく、凛ちゃんやにこちゃんが『勉強解らない！』って喚いているけど、何が苦手なのか解らないよ…　あんな簡単なのに…　運動も本気を出せばなんだろうが出来る。　だからダンスも振り付けをこっそり紙に書いて誰もいないところで１人で練習した。　練習中に私らしくふざけているのを誤魔化すためにね…　凛ちゃんみたいに運動神経がもともとかなり良ければ別だけど、普通あれだけふざけて本番で上手く出来るはずないじゃん…　作詞も作曲もやろうと思えば

1人で出来た。それに、廃校を阻止するならアイドルではなくても他の方法もちゃんと考えていた。でもね……）

穂乃果はそこまで考えるとポツリと呟いた。

「それは、高坂穂乃果らしくないからね……」

（だから、こうやって演じている。本当は結構ネガティヴで後ろ向きなんだよね…　運にもそんなに自信があるとは思ってないし…）

穂乃果はサイドテールの髪型をいじりながら心の中で続けた。

（でも、最近だんだんキツくなってきたんだよね、アイドルとして名を馳せてから周りに人が増えて『自分』を演じることが大変になってきたって…　『素』の私を見たら、きっとみんな幻滅する。もしかしたら最近、人気投票が低迷したのは本性がバレてきているからかな？　そう考えるといい気味だね…）

穂乃果は机に頬杖をついて続ける。

（いつからかな？　こんな風に自分を偽るようになったのは…　海未ちゃんやことりちゃんを助けて親友になった時からだったかな？　あの頃から『この私』を作ってたからね…　海未ちゃんに言われたんだ『貴女はどんな時でもみんなを笑顔に出来る太陽のような人ですね』と…　私は太陽なんかじゃないのに…　でも、演じている私を見るとみんなが太陽や光のようだと言う）

穂乃果は顔を伏せた。

（そこから私は自分を変えようと考えた。　そして、出来た自分が『めんどくさがりやで、ポジティブで後先を考えない無鉄砲で我が儘な馬

鹿』だ。まあ、いわば、みんなのよく知る『私』だよ。　でも、高坂穂乃果っぽいでしょう？　だからこそ、お父さんやお母さん、妹の雪穂もその『私』を素の私だと思ってる。でもね、本当の私は…）

穂乃果は黙ったままさっきのノートに『本当の私』と書いた。
そして、誰かに読ますようにこう書いた。

本当の私はね、
頭も良いし、勉強も出来る。
運動だって出来るし、ダンスもやろうと思えばちゃんと出来る。
そんなに性格は明るくない、どっちかって言うと暗いしネガティヴだ。
運はそんなに良いとは思ってない、まあ、だからと言って悪いとは思ってないけどね…
面倒臭いとも思わないし、根気強く出来る。
後先しっかり考えて行動もするしね。　それに、実はあのμ☒sの8人もこっそり私が選抜したメンバーだしね…　まあ、このことがバレたらなんて言われるか分からないけどね。
さらに、すごい策士で、思慮深くて、コミュ力も知っての通りすごく高い。
そして、誰よりも臆病でずる賢くて寂しがり屋で怖がりの人なんだ。

穂乃果はそこまで書くとシャーペンをペンケースに片付けて夜になった暗い空を見上げた。

「こんな、『高坂穂乃果』を見せたらみんなはどんな顔をするかな…」

穂乃果は自嘲しながら呟くと、ベッドに横になった。
今日の授業も自習で理解できたからもう起きている必要はない。
眠る前に穂乃果は心中で小さく呟いた。
（また、明日も『私』を演じないといけないな…　でも、辛くなったらまたあのノートに書こうっと…　その時はみんなの知らない素の私でね…）
穂乃果はそう思うと布団をかぶり眠りについた。

しかし、穂乃果は知らなかった。
自分のつけている仮面はもうすでにカタカタ音をたてて外れかかっていることを…

高坂穂乃果の日常

朝日が明るく街を照らすある日、人々が目を覚ますなかこの少女も目を覚ます。

「ん……　朝か…　ってなんだ…　まだ6時半じゃん…」

(おはようございます。みなさん、私こと高坂穂乃果は朝早く起きるのが癖です。

え？　朝寝坊をして幼馴染に起こされないのかって？

それは、みんなのよく知っている『私』の方だよ。

本当の私はどっちかと言うと眠りが浅くて早く起きるのがほとんどなんだ。

とは言ってもみんなには寝坊癖のある『私』として通っているからいつも幼馴染の2人がくるまで二度寝するか、勉強してるんだけどね…

何はともあれ、2人がくるまでまだ1時間以上あるから今日のこの時間は勉強に当てようかな…)

穂乃果は心の中でそう思うと音を立てないように勉強机で教科書を広げた。

家族には穂乃果は寝坊癖があるから幼馴染が迎えに来るまで起きない、と思われているから部屋に入って来られることはない。　この時間は穂乃果が朝の時間で唯一『私』から私に戻れる時間だ。

「えーと…　今日は数列をやるか…　数学は今は数列をやっているから…　等差数列の和の部分を中心にやろうっと…」

穂乃果はそう独り言を呟くととノートと教科書を広げて問題を解き始めた。

まだ、朝は涼しい空間なのでこの時間で勉強するのは頭に入りやすく心地いい。

「……」

穂乃果は無言で教科書とノートと睨めっこし始めた。

サラサラ、ペラペラとノートに文字を書く音と教科書のページめくる音だけが静かに部屋に響いた。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
「ふう…　そろそろ時間か…」
穂乃果は時計を見ながら小さく呟いた。
あれから1時間近く穂乃果は勉強していたのだ。　時計の針を見ると短針が7をすぎていた。
そろそろ、家族が起こしにくる時間だ。
穂乃果は私から『私』になるため仮面をつけ、ベッドに横になり目を閉じる。

ガチャ

(起こしにきたようだ。　この足音は雪穂かな？　さあ、今日も『私』にならないと…)
穂乃果はそう思うと目を閉じて寝ている振りをした。
すぐに雪穂がため息をつきながら穂乃果の体を揺すって起こそうとする。
そして、穂乃果は【今、起きた】と言うように大きな欠伸をして、雪穂に時間を確認して「遅刻だ〜！」と言いながら慌ただしく準備する。
制服に着替え、朝食を食べている時に幼馴染の2人の呼ぶ声がきこえた。
その声に慌てて残りの朝食を食べ、カバンを持って外に出る。
「穂乃果、遅いです！」
「あはは！　ごめんってば〜」
「まあまあ、2人とも落ち着いて…」
いつものように遅れてきた『私』になった穂乃果を海未が叱り、穂乃果が笑いながら謝り、ことりが2人を宥める。
これも、もはや見慣れた光景だ。

それから、私たち3人は学校に向かって歩く。

ー教室ー

「えー　ここの問題は…」

μ☒sの朝練が終わり、授業が始まった。

今の授業は数学、先生が朝に自分が解いた問題を解説している。

穂乃果は自分はもう理解しているので聞かなくてもわかる。　いつも授業中は寝ているので眠たくなくても机に突っ伏して寝た振りをする。

授業が終わり寝たことをまた、幼馴染に怒られるのも最早お約束だ。

ー昼休みー

キーン　コーン　カーン　コーン

午前中の授業が終わり昼休みになり、いつもの中庭で3人で昼食を食べる。

購買で買ったパンをいつもの通り「パンはうまいー！」と笑顔で言いながら食べて両脇にいる幼馴染2人と笑い合う。

これも見慣れた光景だ。

ー放課後ー

今日の授業が全て終わり、放課後になり幼馴染2人と部室に向かう。

部室のドアを開けるとみんながすでに着替えて準備をしていた。

全員が着替え終わると屋上に向かい練習を始める。

練習中にわざとふざけたり、馬鹿なことをしてみんなをピエロのように笑わせたりして、その度にしっかり者役の海未や絵里に怒られる。　それの繰り返しをしている内に辺りは次第に暗くなり完全下校時刻になり帰る準備をして下校する。

ー自室ー

「はあ…　今日も終わったな～…」

家に帰り食事と風呂を済ませ、自室に入ると穂乃果はベッドにゴロンと横になって呟いた。

この時間は1日がようやく終わり穂乃果が仮面を外せて『私』から私に戻れる時間だ。

誰にも気づかれないように四六時中仮面をつけているのは辛いものだ、穂乃果は小さく伸びをして今日を振り返っていた。

（今日もボロは出していないな…　よし！　明日もこの調子で頑張ろう）

穂乃果は本性がバレていないことを振り返ると自分を元気付けるように自分自身に言い聞かせた。

そして、明日も演じるために布団をかぶり眠りにつこうとすると…

ピロロロロロ…！　ピロロロロロ…！

「!!?」

突然音がどこからか聞こえてきた。

突然なった音に穂乃果が驚きながら音源を探すと

「なんだ…　携帯電話か…」

なっていたのは自分の携帯電話の着メロだったのだ。

穂乃果は安心したように息をつくと携帯電話の液晶画面を見た。

「誰だろう？　μ☒sのメンバーからかな…？　ん？」

穂乃果がμ☒sのメンバーからの連絡だろうと思い液晶画面を見るとそこに表示されていたのはμ☒sのメンバーの名前でもなく、はたまた知っている大人でもなく、電話の相手はこの人だった。

「こんな時間に何の用なのかな…？　加藤くん…」

穂乃果はみんなの聞きなれない名前を呟いた。
君付けで呼んでいるあたり男の子なのだろう。
穂乃果はため息をつきながら通話ボタンを押し電話に出る。

「はい、もしもし…」
『高坂！　でるのが遅いじゃねぇか‼？　待ちくたびれたぞ！』
穂乃果がうんざりしながら電話にでると電話の相手の加藤が電話にでるのが遅いと文句を言った。
「ごめんって…　何の用？」
穂乃果が適当に謝りながら加藤に用件を確認する。
『ああ、そうそう、忘れるところだった。　高坂、また今夜あの場所で会わねぇか？　川野と竹迫も満永も呼んだからさ』
加藤がそう言うと穂乃果は「えー」と不平の声をあげた。
『そう嫌がるなよ。　お前のいいストレスの発散にもなるぞ？　それに、お前に会いたいって言っている奴も来るからさ。　お前も来なよ』
加藤が言うと穂乃果は首をひねった。
加藤達たちと過ごすのはとても楽しいがやっぱり深夜に歩きまわるのは気がすすまない。
しかし、加藤が何度も『来てくれよ』と誘うのでついに穂乃果の方が折れ『分かった』と返事を返した。
穂乃果が返事を返すと『じゃあ待ってるぞ』と嬉しそうに言い加藤は通話を切った。

穂乃果は加藤との電話が終わるとベッドから起き上がり、ハンガーにかけてある上着を一枚羽織って部屋を出た。
今は夜も遅い時間だ。家族を起こさないようにそろりそろりと家を出て加藤との待ち合わせ場所に向かった。

本性を知る者たち

家を出た穂乃果は加藤との待ち合わせ場所に小走りで向かった。
待ち合わせ場所といってもそんなに通いところではない、むしろ近くだ。
待ち合わせ場所には5分で着いた、ベンチに黒色のショートカットの髪型で猫背の男性が座っている。
そう、彼が加藤だ。
穂乃果が声をかけると加藤も穂乃果に気づいてニッコリ笑った。
「来たか、あっちの遊具のトコに川野たちはいるよ」
「分かった」
加藤が自分が読んだ川野たちは遊具の近くにいるといい遊具の近くを指差した。
そう、待ち合わせ場所は穂乃果の家の近くにある小さな公園だ。
穂乃果と加藤は川野たちのところに向かった。
昼間なら子供達がよく遊んでいる公園だが夜は公園に1つしかない通常より少し大きめの街頭が公園を照らしているだけで、さっき加藤が座っていたベンチと川野たちがいるであろう遊具以外は照らされておらず懐中電灯がないと夜は見えない。
それに、街頭で照らされているところも薄暗くて遠くの方はよく見えない。
遊具の近くに穂乃果と加藤が来るとそこには3人の男女がいた。
ブランコに乗っていて背が低く柔和な顔立ちをしていて、茶髪の天然パーマの髪型の男性、同じくブランコに乗っていて、青色のロングヘアーの髪型で背が高くかなりの細身で眼鏡をかけた男性、滑り台の階段に座り緑髪のセミロングの髪型で猫のようなつり眼で高めの鼻に厚めの唇をした勝ち気な印象を与える女性だ。
天然パーマの男性が川野、ロングヘアーの男性が竹迫、セミロングの女性が満永だ。
川野たちは穂乃果を見ると笑みを浮かべそれぞれ話しかけて来た。
「おう、高坂、久しぶりだな！　また会えて嬉しいよ」

「ネットでみたぜ、　スクールアイドルの活動、ますます激しくなってるみたいだな」
「何もないところからやって、Ａ．ＲＩＳＥにライバル宣言されたんだって？　これから相当苦労するね～」
３人の言葉に穂乃果は苦笑した。
そして、しばらく５人で雑談をした。
その時、話題のスクールアイドルの話になり穂乃果たちのグループである μ☒ｓの話を川野たちがし始めた。
川野たちは穂乃果に笑いながら言った。
「それにしてもさ、あの個性の強くて変なところで頑固な μ☒ｓのリーダーになるなんて、お前も大したもんだよな～」
ブランコをギイギイ音を立てて揺らし、穂乃果に笑いかけながらからかうようにいう川野に穂乃果は『ハハハ…』と愛想笑いを浮かべる。
それをみて満永も穂乃果に言った。
「そうよね～　あの８人はそれぞれ個性が強すぎるわよ。　ぶっちゃけ、あんたがいないとあいつら浮いてたんじゃない？」
満永がヘラヘラ笑いながら言った。
「だよな～　お前のあの８人の加入時の話を聞くだけでも思うもん。
それにさ、世間ではお前らのやってるアイドルっつーもんはオタクの連中や夢見るおめでたい年頃のお嬢さんが見てくれに騙されてるけどよ。　実際はそうでもないのにな～」
竹迫も便乗すると、川野と満永と加藤が大笑いをした。
そんな中、穂乃果が重々しく口を開いた。
「そうだよね。　アイドルはどんな時でも笑っていなきゃいけない。
まるでピエロのようにね…」
穂乃果はいつも、μ☒ｓのメンバーや家族などにはしない、影のある表情で言った。
穂乃果は続ける。
「私もこんなスクールアイドルをやるまでアイドルの大変さなんてネットやドラマぐらいでしか知らなかったよ…　でも、いざやってみるといくら体調が悪くても、憂鬱な気持ちでもファン受けする笑顔で

ライブなんかはしないといけない…　見ている人からはどんなに華やかに見えてもその実態は辛い拷問みたいなものだよ…」
穂乃果はそう言うと顔を伏せた。
周囲の人たちから大好評の太陽のような笑顔は今の穂乃果の顔には少しもなかった。
知らない人から見れば、よく似た別人とも間違われても不思議ではない。
そう錯覚するほど、今の穂乃果の顔からは『高坂穂乃果』らしさが微塵もないのだ。
普段ならみんなを笑顔にできる太陽と称される彼女だが、今の彼女は太陽は太陽でも黒い太陽だ。
穂乃果のそんな様子を見て、加藤が口を開いた。
「でもさ、そう考えるとお前は常にアイドルだったんだな」
加藤が言うと穂乃果は怪訝そうな顔で加藤を見た。
加藤は不敵に笑いながら続けた。
「だってそうだろ？　お前は常に誰の前でもそんなことをしてるんだからさ、アイドルとしては理想の姿なんじゃないのか？」
「……そうだね」
加藤の言葉に言い返せず穂乃果は小さく呟いた。
加藤は続けた。
「それに、俺もみんなもお前の苦しみ分かってるつもりだぜ？　だって、俺たちもさ……」
加藤は一旦言葉を区切ってから続けた。

「お前と同じなんだから……」

加藤はそう呟くと竹迫達を見た、竹迫たちも静かに頷いた。
穂乃果は俯いたままだ。
加藤は続けた。

「お前が《馬鹿な奴》の仮面をつけているなら俺たちは優等生の仮面をな…」

加藤の言葉に竹迫たちは無表情になり暗い空を見上げたり、街頭で照らされておらず真っ暗で人には見えない部分を見た。

そう、穂乃果と彼らは1つの共通点で集まっていた。

もう分かる通りそれは……

【本性を誰にも見せないと言う共通点だ……】

本性を隠している者たちの会話

加藤の言葉にみんなが黙った。

そう、ここにいる5人は【本性を誰にも見せない】という共通点の基に集まっている。

加藤は穂乃果を見て続けた。

「俺たちはこの辺りでは1番の進学校の青南学院高校に通ってるからな、私立校だから校則もかなり厳しいし、学校側もなるべく生徒たちをいい感じに見せたい。

それに、俺たちはそこではぶっちゃけ優等生だ。　4人とも成績が良くて大人受けも良くて、側からみれば羨ましいと思うかもしれないけど、実際は自分たちの評価を落とさないために必死なんだぜ…」

お前と違う意味で同じだと加藤は付け加えた。

「そうだな…　僕も加藤たちとは最初はいつ蹴落としてやろうかと考えていたんだ。　自分の評価を上げるためにな、そんなのは進学校では珍しくない…　あの時はライバルなんて生易しいもんじゃなかったよ…　自分以外はみんなが敵だった…」

加藤の言葉に同意しながら竹迫が続けた。

「でも、ある日、みんなが同じ気持ちだったのが分かって仲良くなったのよね」

満永が楽しそうに笑いながら言った。

「ああ、それで、4人で遊びに言った時μ☒sのライブがたまたま開催されてたんだよな、そんな時、俺たちと同じ目をした人がセンターで必死に笑顔を作りながら歌って踊っているのを見たんだよな」

川野が穂乃果を見ながら言うと、穂乃果は顔を伏せた。

川野はニッコリ笑って続けた。

「お前は見るからに辛そうだったもん…　ライブが終わった後も、笑顔でバカっぽく振る舞ってメンバーをピエロのように笑わせている。

側から見れば拷問のようなものだったさ」

「……」

その言葉に穂乃果は瞳を潤ませた。

「お前と俺たちは引き合う磁石のように親しくなったよな、ライブが終わった後、トイレに行くとか言って1人で仲間から外れて、見えないところでため息ついてるお前のとこに行って話しかけたら、お前は俺たちと話しているうちに次第にボロボロ泣きだしたからな～…」
川野が当時のことを思い出したらしく笑いながら言った。
「お前と俺たちは似ているんだ。　家族にも本性を出さないとこもそっくりだ…」
加藤が言うと竹迫も続けた。
「そうだよね、僕たちも両親からのプレッシャーから自分を殺して常に優等生を演じなければならないからね…　君は僕たちが付けている仮面とは違う仮面を付けているけど、僕たちにはその苦しみが分かる」
竹迫が穂乃果に笑いかけた。
「周りの人たちは私たちの苦しみなんて分かってくれないわ…　道徳とかなんてクソくらえよ、クラスメイトに心を開いていって、【みんなが友達】みたいな友情がテーマになっているはかばかしい青春ドラマやアニメがよくあるけれど、私たちから見ればあんなの気持ち悪いの一言よ」
満永が鼻で笑いながら言った。
「満永が言ったように、俺たちの苦しみは俺たちにしか理解されない。でも大丈夫だ。　本当のお前が周りに受け入れてもらえなくても俺たちはお前を受け入れるさ。　本当のお前は優しい奴だ、俺たちと違い本性を隠しているのはみんなを失望させないためだからな…」
加藤が優しい顔と声で子どもをあやすように穂乃果に言った。
穂乃果が顔を上げると、そこにはいつの間にか本当の自分の唯一の味方である加藤たちが笑顔で立っていた。
穂乃果は肩を震わせていたが堪えきれなくなったのか加藤たちに涙を流しながら抱きついた。
加藤たちは穂乃果を優しく抱きしめ返した。
穂乃果はこの抱きしめ返してくれた加藤たちの温もりは今までの誰よりも暖かく感じた。

この時間が穂乃果は何よりも好きだ。
自分の目の前にいる加藤たちは素の自分のことを受け入れてくれる。
誰にも明かさない本当の自分を受け入れてくれる。
穂乃果はそれだけで幸せにだった。
本当の自分を出してしまえば、自分の居場所がなくなってしまう気がしたから…
それこそ世界中何処を探してもないような気がして怯えていた。
自分の存在が不安定になりそうで、存在意義がまったくわからなくなりそうで……
自分の居場所が欲しいのは我儘でもなんでもない自然な事なのに…
それを願うことすらも彼女はできないほどだ。

穂乃果と加藤たちはしばらく抱きしめ合っていた。
ようやく穂乃果は落ち着いたらしく加藤たちから離れた。

夜も日付が変わるほどに遅くなり明日も学校があるということでその日は解散となった。
穂乃果の心は加藤たちと合ったことで晴れやかになり、明日も頑張ろうと思えた。

加藤たちも自分と同じ気持ちの人たちと会えたことにより喜びを感じ、明日も頑張ろうと思えるようになっていた。
それぞれが晴れやかな気持ちで公園を出ていった。

しかし……

「そ、そんな…　穂乃果ちゃんが…　そんな…」

公園の近くで今の一部始終を見ていた、人影は震える声で呟いた。

「信じられない……　そんなの絶対に信じられない……！」

その人影は逃げるように公園を走り去っていった。

街頭に照らされ、その人影の姿が照らされた。

紫色のかかったお下げ髪の髪型で大きな胸の女性だ。

そう、音ノ木坂学園の3年生で元副生徒会長でμ☒sのメンバーでもある、【東條希】だ…

希は涙を流しながら夜の闇を駆け抜けていった。

そして、とうとう、穂乃果の付けている仮面が音を立てて外れかけた。

これが原因で全ての歯車が狂い始めた。

しかし、誰一人としてそのことに気づいた人間はいなかった。

本性を知ったもの

ー希　ｓｉｄｅー

ウチはμ☒ｓに入らなかった方が良かったと考えた日は一度もない。

なぜなら、μ☒ｓに入って、今までとは比べものにならないくらい毎日がキラキラ輝いていたからだ。

『みんなが偽りなく心の底から仲良くできる』μ☒ｓに入る前は周りにいつも気を遣って本当の自分を曝けだせなかったウチでも居場所があったからだ。

穂乃果ちゃんには感謝している、ウチの居場所を作ってくれたこと、ウチを受け入れてくれたこと。

みんなにも感謝している、ウチを仲間だと言ってくれたこと、ウチを友達だとも言ってくれたこと。

μ☒ｓはウチの１番の自慢だった。

だからこそ信じられなかった。

穂乃果ちゃんの本性を…

私たちのことをどう思っていたのかを…

ウチは穂乃果ちゃんたちの会話を聞いている途中は何度もそれ以上聞きたくなくて逃げ出したかった。

しかし、ショックでなのか足が動かなかった。

止むを得ず、彼女の本音を最後まで聞いてしまった。

ウチは涙が止まらなかった。

信じたくなかった…

穂乃果ちゃんを除いたμ☒sのメンバーはウチが言うのもなんやけど、ウチを含めて人付き合いが苦手だろう。

それに、変なところで頑固で、プライドが高く自分の意思を曲げない人が多い。

自分についてこれない人はいらない、自分の言い分を聞いてくれない人は相手にしない。

にこっちや絵里ちが良い例やな。

他のメンバーも見ればそうやった。

幼馴染の2人もことりちゃんは大らかそうに見えて、自分の意思は曲げないし、海未ちゃんは言わずもかなそうや。

1年生組も真姫ちゃんは育ちのせいなのから絵里ちたち並みにプライドが高いし、花陽ちゃんもアイドルについてはにこっち並みに誇りを持っていて、それを侮辱する人は許さない。

各言うウチもみんなほどではないにせよ、プライドが高いところはある。

1回目の予選会の後が良い例やな。

1回目の予選会の後に、穂乃果ちゃんがアイドルを辞めると言ったときに、いつものウチならその日のうちにでも穂乃果ちゃんに考え直すように説得しに言ったり、亀裂が生じたみんなの関係を修復するために画作するのに、何もしなかった。

咄嗟のことで混乱していた、と言えばそれまでだけど今思えば他の気持ちもあったと思う。

その気持ちはおそらく、自分が始めておいて、急に辞めるなんて言い出した彼女を許せなかったこと。

そして、『自分ではμ☒sが出来なくてウチが色々と裏工作してあげたのにそれを壊したのが許せなかったから』だろう。

今思えば、その時のウチはまるで、ウチの努力を侮辱されたような

気分になっていたんやろう。

だからこそ、穂乃果ちゃんが許せなくて咄嗟にいつも通りに出来なかったんやろう。

でも、すぐに穂乃果ちゃんは戻ってきてくれた。

ウチは嬉しかったけど、今思えばなんかそれも変な話やったんや。

自分が作り出した μ☒sを辞めるとまで言うくらい自分を追い詰めていたはずなのに、ウチらのあれだけで普通戻って来るやろうか？

普通は気まずさとかを恐れるやろう…

いくらウチが知っている『馬鹿な穂乃果ちゃん』でも同じはずや。

『だったらどうして戻って来たのやろうか？』と思うけどそうなるとこう考えるしかない。

『戻ってきたのは、何かまだ目的があったから』やろう。

つまり、ウチらは穂乃果ちゃんの打算で動かされていただけやったんや。

穂乃果ちゃんにはウチらの持ってないコミュ力と他人を理解する能力を持っている。

人付き合いが苦手で、他人の気持ちを自分のように理解出来ない、独りよがりなウチらを利用していたんや。

そうなると、2回目の予選会でラブライブに出場はしなくても良いと言った彼女の言葉にも説明がつく。

もともと、穂乃果ちゃんは『廃校を阻止するため』に μ☒sを作ったんや。

つまり、廃校が取り敢えずは取りやめになったことで μ☒sがもうラブライブを目指す必要はない。

穂乃果ちゃんがグループに戻って来たのも、『まだ廃校が阻止されたかどうかわからなかったから』やろう。
だが、廃校がとりあえずでも取りやめになったら、μ☒sはもういらない。
ラブライブで優勝するのは、普通に考えたら雲をつかむような話や。
だとしたら、目的を果たしたらそんな雲をつかむようなことをするより他のことをした方が良い。

穂乃果ちゃんは大体こんな考えやったんやろう。

希は自分の洞察力が恨めしく思った。
分かりたくないのに、さっきの会話で穂乃果の本性の推測が立つからだ。
希はμ☒sのメンバーが揃ったときに撮った写真を見つめた。
みんなが最高の笑顔で笑っている。
ウチも、こんな楽しい写真撮影は今までなかった。
真ん中の穂乃果ちゃんも楽しそうに笑っている。

ねえ、穂乃果ちゃん…

この笑顔は嘘やったの……？

ウチらの太陽やなかったの……？

『μ☒sができたのは希ちゃんのおかげだよ！』と私に言ってくれた、貴女の言葉と笑顔は偽りだったの……？

希は心中で穂乃果に対しての疑問を誰に向けてか問いかけた。
しかし、夜の闇にそれは溶けていくだけ…
暗い闇は何も答えてくれない。

希は脇目もふらず夜の闇を駆け抜けていった。

ー希　ｓｉｄｅ　ｅｎｄー

『知らぬが仏』と言う言葉を知っていますよね。
知らないままの方が幸せでいられると言うことです。

狂い始めた歯車はもう、止めることはできない。

高坂穂乃果の日常　希ｓｉｄｅ

ー希　ｓｉｄｅー

公園で穂乃果ちゃんの本性を知ってからの次の日、ウチはいつもの通り音ノ木坂学園に登校した。

３年生の自分の教室に入り校門を見下ろすと２年生組が笑顔で登校している。

笑顔で穂乃果ちゃんを怒る海未ちゃんを宥めることりちゃん。

寝坊で遅刻したのだろう穂乃果ちゃんを叱っている海未ちゃん。

そして、真ん中でニコニコの笑顔を振りまきながら『ゴメンゴメン』と謝っているのだろうジェスチャーをしながら後頭部をかいている穂乃果ちゃん。

ウチはいたっていつもの通りの穂乃果ちゃんのように見えた。

ウチの居場所をくれてウチらを照らす太陽のような存在、それが高坂穂乃果だ。

今、校門を幼馴染コンビと歩いているこの穂乃果ちゃんはウチのよく知る、ウチが大好きな穂乃果ちゃんだ。

ウチは昨日の深夜に公園でウチらの知らない他の高校の人たちと会っていた時の穂乃果ちゃんはこの穂乃果ちゃんとよく似た全く別人のように見えた。

(なんだ…　いつも通りの穂乃果ちゃんか…　昨日のアレは穂乃果ちゃんとよく似た別人やったんや…)

ウチはまるで自分に言い聞かせるように心の中で呟いた。

ー昼休みー

午前中の授業を乗り切り昼休みになった。

ウチは昨日の深夜にコンビニで買ったパンを食べようとバッグからパンを取り出す。

いつも昼休みはウチの親友の絵里ちと過ごす。

親友の絵里ちが待っている生徒会室に行く途中、ふと窓から中庭を

見下ろした。
そこには、幼馴染コンビに挟まれた穂乃果ちゃんが2人に挟まれる真ん中という定位置でいつもの通りパンを頬張っている。
彼女のお決まりのセリフでもある『パンはうまいー』と言うセリフを言いながら両脇の幼馴染と笑い合う。
そこに、1年生組の凛ちゃんと花陽ちゃんが加わり離れた場所にいた真姫ちゃんを穂乃果が手を引いて連れてきた。
真姫ちゃんは照れ屋な性格から嫌がっているように言っているが凄く嬉しそうに顔を綻ばせている。
6人で昼食となんとも賑やかで微笑ましい光景だった。
見ている希も頬が緩む。
(やっぱり、昨日の穂乃果ちゃんは穂乃果ちゃんとよく似た別人やったんや…そうに決まってる…)
ウチはそう心の中で言うと親友が待っている生徒会室に向かった。

ー放課後ー
今日の授業も全て終わりいよいよ、ウチの1番の楽しみであるμ☒sの練習の時間がやって来た。
アイドル研究部の部室で着替えてみんなで屋上に行き練習を始める準備をする。
いつものように絵里ちと海未ちゃんが場を仕切って練習が始まる。
休憩時間になってウチが持参したスポーツドリンクを飲みながら穂乃果ちゃんをチラリとみる。
穂乃果ちゃんはいつものように凛ちゃんとふざけ合い、にこっちと真姫ちゃんに絡みつき2人を怒らせて戯れていた。
それにみんなが笑い始めて怒っていたにこっちたちもつられて笑いだす。
そうこうしているうちに下校時刻が近づいた、みんなが部室に戻り着替えを済まし帰ろうとする。
ウチも帰ろうとすると…

「ゴメン！　今日、学校に忘れ物しちゃった！　先に帰っててもらえないかな？」
穂乃果ちゃんが海未ちゃんたちに言った。
海未ちゃんは軽く小言を言ってことりちゃんは笑顔で宥める。
これも見慣れた光景なので誰も何も言わず微笑ましく見ているだけだ。

完全下校時刻２０分前になり、みんなが部室を出始める。
ウチもみんなに挨拶をして部室を出た。

なんてことや…　まさかウチまで忘れ物してたなんて…
よりによって筆箱を部室に忘れるなんてな…
完全下校時刻まで後１０分や！　急がないと…！
そうして、ウチがアイドル研究部の部室を開けようとすると中から女性の声が聞こえてきた。

「でだから……！　ここは……！」

ウチの聞き覚えのある声やった。
いや、聞き覚えがあるどころか毎日聞いている。
ウチはドアの隙間からこっそりと中を見た。
今は飛び込んではいけない気がしたからや。
ソロ…

ドアの隙間からこっそり中の様子を伺うと…

「っ⁉？」

カタカタカタカタ……

そこには横にたくさんの書類を置いてパソコンの前でウチらが見たこともないような真剣な表情をしている穂乃果ちゃんだった。

キーボードを打つ速さもかなりのものだ。

「えーと…？　来月の全部活動の活動報告はまとめたと…　あ、美術部の物品補充も要請が来てたっけ、あとは、陸上部の新しい活動の要請だな…」

穂乃果ちゃんはブツブツと独り言を言っている。

内容から察するに生徒会の仕事なのだろう。

ウチは開いた口が塞がらなかった。

自分の知っている穂乃果ちゃんはこんなことは普通は出来ない。

穂乃果ちゃんはスマートフォンの時計を見た。

「あっ！　もう、完全下校時刻１０分前じゃん！　弱ったな～…　半分しか進まなかったよ…　海未ちゃんたちにバレないようにしなきゃなぁ～…　明日、生徒会室にこっそり持って行こうかな？　海未ちゃんたちには、海未ちゃんがしたと言っておけば、あの２人は私を見下しているから簡単に丸めこめるからね…　全くあの２人は…

特に海未ちゃんは私に怒るばかりで仕事の要領悪いし、パソコンの使い方も下手だから、保存したはずのデータがちゃんと保存されてなくて消えてたから、私が作り直す羽目になったこともあったのに…　海未ちゃんにバレないように海未ちゃんのしたところまで戻すのは大変だったよ…　ことりちゃんも笑ってばかりいないでちゃんと仕事してよね～…なにしろ…」

穂乃果が発した次の言葉にウチは今度こそ自分の耳を疑うことになる。

「みんなの前では私は2人の【出来損ない】と言う設定なんだから……！」

「っ‼？」

そこまで聞いてウチは筆箱を忘れたことを忘れ、脇目も振らずに部室の前から走り去った。

嘘じゃなかった……！

別人なんかじゃなかったんや……！

昨日の深夜にウチが公園で見た穂乃果ちゃんはウチがよく知ってる穂乃果ちゃんやったんや……！

ー希　ｓｉｄｅ　ｅｎｄー

希は涙を流しながら夜の住宅街を駆け抜け、マンションの自分の部屋に入ると夜になった暗い部屋で1人で泣き続けた。

ー穂乃果　ｓｉｄｅー

「ん？　あれ…？　今、何か外で誰かが走り去る足音が聞こえたような…？」

希が走り去った後、穂乃果が部室のドアを開けて外を見る。

「気のせいか…？　誰もいないしね…」

穂乃果はそう言うと慌てて帰り支度をして完全下校時刻2分前に学校の校門を出て帰路についた。

太陽はみんなを照らす反面、恐ろしい性質も持っている。

暖かいだけが太陽じゃない。

太陽はこの宇宙の大ボスだ。

太陽が爆発をしたらどんなに恐ろしいことが起こるかは計り知れない…

その爆発は刻一刻と近づいていることをまだこの時は誰も知らない…

そう、まだ…

この時は知らない…